

土器 盃

〔三中口傳 二甲〕御酒盞事

三獻毎度土器可供之

〔海人藻芥〕鍾ハヘイカウ二度入、三度入是也、然近代間ノ物五度入、七度入、十度入、塞鼻如斯種々土器令出來、酒興盛故也、

〔寸法雜々〕一盃のかはらけ寸によりて、名をいふなり、

七度入、九寸は九度入と云、いづれも此心得也、

〔今川大雙紙下〕酒に付て式法の事

一、まうげんの時は、御とをりとして、ちいさき土器をあまたつみて御前に置也、式は七度入、或は五度入にても酒をばうけ候て、卒度口をあて、をかる、を今のちいさきかわらけにつき渡して、めしいださる、人に下さる、也、此時は土器を持って立也、

〔資勝卿記〕元和七年十月廿二日庚寅、能過テ、天酌水尾ニテ御トヲリ有、五度入ニテ三盃、至六位有之、

〔貞丈雜記酒盃〕一、今時盃に用るかわらけに、内ぐもりとて、土器の内を黒く三ツ星の様に、やきたる土器あり、内くもりといふ名は、舊記に見及ばず、古はなき物なるべし、くもるといふ事は、祝儀などにはいむべき名也、又内くもりとは、うつくしくはだをみがきたる物也、これをはだよしといふ、古ははだをみがく事はなし、さればかわらけのひねりどめを、前へむけて酒のむ事、出陣にはいむ由舊記にあり、是みが、ぬ土器を用たる證據也、みがきたるにはひねりどめなし、

〔安齋隨筆 前編 十五〕長柄の銚子にもみちの土器 同館 高草子、長柄の銚子にもみちの土器すへてとあり、もみちのかわらけとは、赤きかわらけの事成べし、赤きかわらけは、常のかわらけ也、白かわらけもあるゆへ、もみちのかわらけと云たる也、